# 第3分科会

会場:仙台国際センター 萩

## 研究課題

- ① 子どもの居場所づくりと公民館の役割
- ② 地域に根ざした青少年の ボランティア活動

## 「青少年教育」

【助言者】 文部科学省生涯学習推進課

専門官 吉岡富雄

山形県高校生ボランティア活動基金

主宰堀米幹夫

【司 会 者】 仙台白百合女子大学人間学部

教 授 模 石 多希子

【事例発表者】 千葉県君津市君津中央公民館

公民館主事 布施利之

山形県角川里の自然環境学校

研究員 出川真也

東京都世田谷区教育委員会生涯学習・スポーツ課

社会教育主事 宗 豊

【記 録 者】 宮城県栗原市生涯学習課

主 査 菅 原 三千世

宮城県栗原市志波姫公民館

主 事 笠 原 明 菜

【運営責任者】 全国公民館連合会

理事 吉木靖範

【会場責任者】 宮城県栗原市志波姫公民館

館長三浦徳義

【総括責任者】 宮城県色麻町公民館

館長白井幸吉

## 第3分科会 「青少年教育」

#### l 事例発表

#### 発表 1 「居場所的」な場としての公民館の可能性と課題

場所としての公民館と事業としての公民館の役割、地域の若者とどう関わっているかについて紹介します。

千葉県君津市は、房総半島の中央部に位置する、人口約 92,000 人の首都圏近郊都市です。 君津中央公民館は、市内一番の市街地にあり、対象人口約は約 15,000 人です。

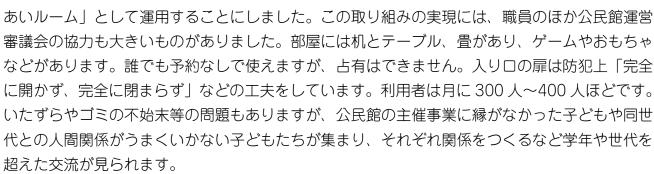
区域内には、都市近郊型住宅地と農村部が半分ずつ広がり、その中に市役所、駅、商業地、公立小学校 2 校、公立中学校 1 校があります。

当館はこの地域の子どもや若者たちが気軽に来ることのできる「居場所的」な場所のひとつとして、彼らのためになんらかの役にたつことを願い、たいへん小さな取り組みを模索しながら進めています。

#### (1) 施設提供の例

①「ふれあいルーム」の運営

この部屋は、玄関に一番近いところにあります。それまで図書室だった部屋が空いたため、新たに「ふれ



#### (2) 主催事業の例 ~「自分たちでつくる自分たちの時間」を意識した事業~

①「成人を祝うつどい実行委員会」

一般的な「成人式」とは異なる内容・意味として「成人を祝うつどい」を実施しています。新成人以外の若者や地域の方々で実行委員会をつくり、地域でつどいを盛り上げています。

#### ② 「KIMITSU 村の四季」

テレビの人気番組「鉄腕 DASH」をヒントに、農作業を主とした活動を行っています。現在、人数は多くありませんが、中学生から 20 代の若者まで参加しており、部活に行くことのできない中学生も何人か参加しています。地元の農家の方々とも一緒に作業を行うことで自然と交流が深められています。



#### (3) 評価と成果

今あげた事例自体の評価と成果について、現段階で考えることのできる点を述べるとすれば、次の2点があげられます。まず、公民館に子どもや若者が日常的に来るようになったこと。次に、若者が地域に対し興味を持ち始めているということです。子どもや若者の来館数は以前と比べ大幅に増加し、「成人を祝うつどい」や「KIMITSU 村」のメンバーが、地域活動に参加するようになった事実もあり、公民館が少しずつ居場所的な場に近づいているのではないかと感じています。

一方、別の視点で、居場所的な公民館についての成果・評価を考える上で注目したい例がひとつあります。過去に「KIMITSU 村」の開催日程をあえて部活や塾の日に合わせて実施したことがありました。すると、学校や塾などでの人間関係とは異なる関係を求めて参加してきた中学生が数人あったのです。参加者同士、他愛ない話をしながらの農作業でしたが、彼らは少なからず「居心地のよさ」を感じていたようです。家でも学校でも会社でもない「公民館」が、さまざまな背景の中に生きる子ども、若者にとって、なんらかの役に立てる可能性を示す例のひとつであると思います。

#### (4) 今後の課題

今日、紹介した取り組みは多くの課題を抱えています。一番大きな課題は、このような取り組みを安定して実施していけるかどうかという点です。

子どもや若者にとって公民館が居場所的な場であり続けるためには、「日常的な範囲にあること」「お金がかからないこと」「自分たちに理解をしめしてくれる大人(職員)がいること」という条件が欠かせません。これらがしっかりしていれば、特別に「居場所」を銘打たなくとも、子どもや若者は日常的に訪れると思います。

もともと公民館は、大人・子どもを問わず、全ての人にとっての「たまり場」であったはずで す。現在ではそれが失われ、各地で居場所をつくる取り組みがなされています。

大事なことは、公民館が「そもそも持っている機能、役割をきちんと果たしているか」という ことに向き合い、行政は「その公民館の条件整備をきちんと果たしているか」ということに向き 合うことではないかと思います。

公民館・行政ともに、本来すべきことの小さな事実を積み重ねることが重要なのではないで しょうか。

#### 発表 2 ふるさと学習活動における青少年の地域参加

戸沢村は山形県の内陸北部、最上郡の西部に位置する、人口約 6,000 人の豊かな自然に囲まれた村です。今日は、そのなかでも最も山間部に位置し、過疎・少子化が激しい角川地区の活動に焦点を当てることにいたします。

#### (1) ふるさと学習活動の推進と地域づくり活動への展開

平成 11 年度、山形県で実施した「地域の学校づくり」事業のモデル地区に戸沢村のある中学校が取り組みました。これは、地域と学校が連携しながら特色ある教育活動を行うというもので、

これをきっかけに地域と学校、行政が同じ土俵で子どもたちの教育について話し合う機会が増えました。県の事業が終了した後も、村教委では独自にこの事業を村内の小中学校すべてに広げ、地域の人材や自然、文化を活用した「ふるさと学習」へと展開していきました。これらの活動は、単に教育というだけでなく、今後の地域づくりへ向けた活動として認知され、担い手育成や地域産業作りを含めた展開がなされるようになりました。

#### (2) 高校生ボランティアの結成と若手人材育成へ

こうしたふるさと体験学習には、多くのボランティアの補助を必要としますが、活動を進めるなかで、高校生の間にボランティア団体が生まれ、さらに活動を支援したいという若者たちが増えてきました。そこで、村教委では高校生や若者の活動のために平成 17 年度よりボランティア支援事業を進めています。また、村長部局でも人材育成の事業を新規におこし、若者の活動の自立的継続へ向けての側面的支援が行われています。

#### (3) 自然体験・文化伝承活動への参画、地元の小中学生への学習支援

前述の「地域の学校づくり」の取り組みを契機として、「南部里地探検隊」が住民の有志によって結成され、主に地域の自然体験や環境保全活動を中心に活動を展開してきました。平成15年には地域住民の有志が「地元学」と呼ばれる地域の自然や文化を総合的に調査・ワーク

ショップする企画を行い、その結果、地区ぐるみで組織する「角川里の自然環境学校」が結成されました。この団体は地域の自然や文化を子どもたちに教え伝えながら集落作りを進めていくことを目的に活動しており、180名を超える地元のお年寄りを先生役に、さらに50名ほどの地元高校生や若者・地元住民が有志としてこの活動を支えています。村や関係機関も4名の専属事務スタッフを備え、活動を支援しています。主な活動は子どもたちへの体験学習の提供ならびに自然・文化の伝承活動、環境保全活動などです。



#### (4) コミュニティビジネス事業への参画

また、地域資源を活用した地域づくり事業においても、集落の住民や地元の女性たちとともに、 東屋作りやログハウス作り、無農薬水田や畑の作業、里山散策道作りや保全活動、地域の食産品 開発など、地域産業育成の活動に従事しています。

## (5) 交流活動への参画

角川里の自然環境学校では、外部の子どもたちを中心として「山村留学」(短期の農村体験学校) を開校し、年間を通じ集落ぐるみで受け入れを行っています。こうした活動は特に外部の子ども との交流が少ない地区において、保護者から重要性が指摘されています。

-83-

#### (6) 中学生(当時3年生)の作文

「『角川? どこにあるんですか』・・こう聞かれて恥ずかしいと思ったことがあります。なぜなら、僕にとって、角川は何もないただの田舎だったからです。(中略)都会の人は、『自然がきれいでいいね』『ゆっくりできていいね』などと言いますが、僕は心の中で、それは違うと思っていました。田や畑仕事の大変さや、町から遠いことによる不便さ、そして高齢化や過疎化など深刻な問題もたくさん抱えているからです。(中略)角川の地元学は、便利さなど表面的なものに憧れ、自分の身近なものの本当の価値に気づかなかった僕が、足元を見直す貴重な体験となりました。(中略)『昔はこんなんじゃなかった』とは言っても、どのようにすれば若者が引き留められ活気を取り戻せるのか、真剣になって解決策を考え実行しようとする人は誰一人いませんでした。今は大人が立ち上がり、解決策を考え、大切な文化を子どもたちに伝えようとしています。(中略)真剣になっている大人の心を、僕たち子どもがしっかり受け止めなければならないと思います。そういう気づきをこれからも大切にしながら、『元気のある田舎・角川』を全国に発信したいと思います。

#### (7) 今後の課題

集落住民が主体となり、高校生から 20 代前半を中心としたサポートによって行われているこれらのふるさと学習やコミュニティビジネスの手作りの活動は、多くをボランティアにたよっています。しかし、活動の継続性や地域に残って暮らしたいという若者が取り組みのなかで増加している現状から、今後こうした青少年教育活動と地域の労働・経済活動の関係性を構築することが急務であり、地域と行政、教育関係機関、企業との連携が課題と言えます。

## 発表3 世田谷区のジュニアリーダー

世田谷区は東京 23 区の西南端にあり、人口は約80万人です。年齢別人口をみると、65歳以上の老年人口は17.0%と年々上昇しており、着実に高齢化が進んでいます。

ジュニアリーダー活動は 12 歳から 17 歳までの青少年を対象に、仲間づくりとそれぞれの地域でリーダーとして活動する際に必要な知識と技術を習得することをねらいとしています。

#### (1) 活動の内容

ねらいを達成するために次のような点に配慮しながら進めています。ジュニアリーダーは子どもの目線で地域と行政をつなぐ架け橋になって欲しいという思いから、できるだけ子どもの発想で事業を進める、また子ども同士で活動する機会を大切にする、子どもを重要な人材として考えていく、という事などです。

具体的な活動内容としては、

- ①リーダー養成研修(前期)
- ②キャンプにむけての研修(テントの張り方・なたの使い方・安全面の研修)
- ③ゲーム研修(仲間作り)
- ④秋季宿泊研修(後期)

- ⑤スプリングキャンプ研修
- ⑥事後のつどい

などの年間活動を通して、ジュニアリーダーの育成をしています。

スプリングキャンプは、新潟県十日町市松代との交流事業で小5を対象に実施しています。キャンプのマニュアルは、ジュニアリーダーが作成し、その中には青少年の目線で考えるリーダーの心構えなどがわかりやすく書かれています。このような所にも行政側の一方的な提示ではなく、ジュニアリーダーの自発性で活動が進められているという事が表われています。

#### (2)活動を通して評価される事柄

活動を通じて次に挙げられるような事柄が成果として期待されます。

- ①効率性 · 効果性
- ②子どもたちの自主的(ボランティア)活動の広がり
- ③リーダーとしての個々の能力の育成

世田谷でもいろいろなボランティア活動が行われていますが、そのボランティア活動とジュニアリーダーの活動をどこで区別化していくかということは議論の余地があります。しかし、担当として考えているのは青少年のリーダーシップの力やコミュニケーション力を育てていくためには、チャンネルはいくつ作ってもいい、ということです。

研修やいろいろな地域を知ってもらう機会を経験する事で、青少年に仲間作りができるチャンスが増え、やがてはそれが地域のリーダーとして活躍できる力にも結びついていきます。それを行政が支援するという事は、教育基盤を整え子どもの人材を大切にしていきたいというねらいにも通じていきます。

それを達成していくためには、研修や活動の目的を明確にし、下準備も含めた大人の関わり方も重要です。例えば、自然・体験学習でテントを張る場合も目的やコツをしっかり押さえてジュニアリーダーに体験させる事で、ジュニアリーダーが活動するキャンプで子どもたちに適切に教える事ができます。そのように一つ一つの活動からきちんとした技能や対応の仕方を身につけてもらうという事も、将来的に地域で活躍できる人材を育てるという点で大切な事だと思います。

#### (3) 今後の課題

- ①活動を通して見える(考えられる)こと
  - ア. 子どもたちが成長する様子と参加者自らがリーダーへと意識が変わっていく姿
- ②今後の方策や展望
  - ア. 子ども会の育成
  - イ. リーダー養成事業の見直し(研修・学習形態)
- ③自然・体験学習の充実
- ④リーダーが活躍できそうな関係機関との連携
- ⑤自分(リーダー)だけの活動に満足するだけで終わらせるのではなく、研修で養った能力を 発揮し、多くの子どもたちと接し、活躍すること。
- ⑥募集について
- 〈募集例〉リーダーになって、野外活動やボランティア活動に参加しよう。



対象:区内在住・在学の中学1年~高校2年生 年会費1.000円(宿泊研修の際は、食材費等が別途必要)

ジュニアリーダーは、学校や家庭ではできないことを自主的に青少年が取り組むことができる場が与えられます。東京には地域教育支援や子どもの放課後教室などの青少年教育への取組みがありますが、年会費を徴収して自分たちで管理しながら活動を進めているなど自発的という点では、ジュニアリーダーの活動の意味は大きいものがあります。

以前にジュニアリーダーだった子どもが、保育士などになって遊びに来てくれた時に、かってのジュニアリーダーの経験が今に結びついている、というような話を聞くと大変嬉しいものがあります。今後ともこのような青少年活動を活発にしていくためにも、行政の立場からいろいろな工夫をしながら支援していきたいと思います。

#### || 質疑応答

#### 事例発表 1 に対して

Q:発表者の方は、教員が本職ですか。

A: 君津市には社会教育主事専門職採用制度があり、私は採用 11 年目です。 最近 2 人の後輩が入りましたが、課題は専門職が配置されることの意味です。専門職が 配置され、さらに複数配置されなければ議論を したうえでの事業展開ができません。

**Q**:中央公民館の対象地区には小学校が何校ありますか。

A:公立小学校が2校あります。

Q:ふれあいルームをつくることになった動機、君津市として必要性がどこにあったのか、公民館主事さんの考え方が重視されたのか、教えてください。

A: 君津中央公民館独自の取り組みです。教育委員 会との意思疎通は分かりません。

Q:ふれあいルームの宣伝の仕方は。

A:特に宣伝はしていません。ロコミで広がっています。

Q: 今後ふれあいルームをどう考えていますか。

**A**:後継者問題が課題ですが、事業を経験した人のなかに、一度まちを離れても戻ってきたい と言っている人がいるので期待したいと思っています。

**Q**:成年・未成年が混じることによるタバコの問題があると思いますが、目配り気配りはどうしていますか。

**A**:ドアを半開きにしており、常に部屋の中が見えるようにしています。また、夜間管理人が 青少年の指導に熱心で注意を促してもらっています。

#### 事例発表3に対して

Q:青少年を対象とした事業を行っていくなかで、必ずぶつかる問題に部活動との兼ね合いと



いうものがありますが、どのようにしていますか。

A: 部活動との兼ね合いについて、例えばジュニアリーダーに派遣依頼が来たとします。その場合、ジュニアリーダー全員の出欠を確認します。

ジュニアリーダーのなかでは、欠席の場合は電話でも構わないので必ず教育委員会に連絡するということを約束事にしています。部活動のためにジュニアリーダー活動を休むのは構いません。逆に、ジュニアリーダー活動のために部活動を休む子もいますが、これらについては、本人の選択に任せています。

担当としては、ジュニアリーダー活動に参加してほしい一方、部活動も頑張ってほしいので、部活動に行く場合はケガをしないように頑張ってと応援するようにしています。

- **Q**: ジュニアリーダーの活動は1年ごとなのでしょうか、それとも対象が中1から高2までとあるので5年間継続して参加している子どももいるのでしょうか。
- A: 研修は教育委員会が主催で実施していますので、1年ごとです。ジュニアリーダーも1年 ごとの卒業となっています。

ただ、実質やめる子がいないので、卒業せずに継続してジュニアリーダー活動を行っています。なかには、小6から高2まで6年間活動している子もいます。

原則としては、高校2年生をもってジュニアリーダーは卒業としています。

- Q:年会費 1,000 円の使い途を教えてください。
- A:集めた会費はプールしておき、備品や消耗品などを買うようにしています。

今年はキャンプ用テントが破損したため新たに購入しましたが、他にもラジカセやデジカメ、またはクリスマス会行事に参加する子どもたちにプレゼントするお菓子なども会費で購入しています。

購入に際しては、担当者と良く相談しながら進めています。

- Q:研修等様々な活動があるようですが、行政が負担する費用はどのくらいでしょうか。
- A: 夏期・冬期の移動研修の際にバスを利用しており、その契約に係る費用があります。 また、消耗品なども青少年教育ということで予算計上されています。
- Q: 東京の場合、高校を卒業したジュニアリーダーが大学に進学するなど地元に残ることが多いと思いますが、そういった大学生やジュニアリーダーを卒業した者が、卒業後どういった形でジュニアリーダーに関わってくるのでしょうか。
- A: 先ほど申し上げましたように、高校2年生をもってジュニアリーダーは卒業します。ですので、高校3年生からはOBということになりますが、高校3年生は受験などもあり、教育委員会やジュニアリーダー活動に顔を出すことはあまりありません。

大学生になってからは、成人の日のつどいや区民まつりなどの地域行事で企画の中心となったり、ボランティアとして関わったりしています。

#### Ⅲ 研究協議

#### (1) 青少年のボランティア活動について

(助言者) 中学生・高校生を中心とした青少年のボランティア活動を 30 年ほど続けてきたが、 人間教育のうえで非常に重要な活動だと思っています。

ボランティア活動を通して様々な人間と出会うことで、若者の犯罪や事件を防ぐ

ことができるんじゃないか、と私は思っています。

平成17年、文部科学省で全国の376 箇所に高校生の地域ボランティア活動 サークルを作るという内容の地域活動ボ ランティア推進事業を立ち上げました。 中学生・高校生は大人と子どもの間をつ なぐ役割をもっています。中高生のボラ ンティア活動を大人や地域社会が応援す



ることで、つながりはさらに強くなり、いい生き方をする若者がたくさん生まれて くるのではないかと思います。

#### (2) 公民館の独自性と多機関との連携について

- ①子どもを中心とした家庭・学校・地域社会・公民館というつながり(円)のなかで、うまく連携がとれていないのではないか、あるいはずっと前からとれていなかったのではないか。
- ②これからは、公民館や地域の青少年育成団体が働きかけて、家庭・学校・子どもたちと連携をとっていかなければならないのではないか。
- ③各地域の公民館や青少年育成団体で実践されてきた多くの事例を同一の様式・要項のなかで 比較対照できるような、そんなマニュアルのようなものを作ることができないかと思っています。
- (事例発表者) 地域の運営団体としては公民館、学校、家庭などがあり、それらすべての要素 は最終的に地域に集約されます。

活動をするなかで多くの機関との連携が不可欠になってきます。連携体制を築くことは非常に重要なことだと思います。

地域での活動が公民館活動のなかで評価され、学校でも評価されるということが、青少年の地域でのボランティア活動を動機づける重要な要素になります。 また、それが地域の活性化につながると思います。

### Ⅳ まとめ

○地域子ども教室に対して非常に高い評価をいただいている。

参加している子どもの9割は楽しいと答え、保護者の多くも子どもたちが楽しんでいると答えている。

この高い評価の背景には、地域ボランティアの 方々の努力がある。

- ○一方で、中高生の地域への参画をどうしていくか という課題に対する答えとして、地域活動ボラン ティア推進事業を立ち上げ、進めている。
- ○公民館とは、子どもからお年寄りまでの多様な

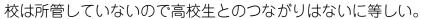


人々の居場所であり、異世代の交流が深められる場所である。

さらに、2007年問題を目の前にした現在では団塊の世代の活躍の場となることも同時に求められている。

公民館が地域のキーステーションとなり、地域全体で子どもたちを育てていくことが必要である。

○市町村の教育行政上、小中学校は所管しているので子どもたちとのつながりはあるが、高



つまり、地元の子どもたちが高校に進学した途端、市町村の教育委員会として手を差し伸べることが難しくなる。

しかし、事例発表していただいた戸沢村教育委員会では、本来ならば所管していない地元の 高校生にまで手を差し伸べ、地元の将来を担っていく若者のことを本気で考えている。素晴 らしいことである。

○山形県には地域単位で高校生によるボランティア活動が盛んに行われており、それは山形 方式と呼ばれている。

#### 特徴は3つある。

- ①活動単位は学校ごとではなく、地域ごと。
- ②活動内容は、それぞれの地域がもつ課題による。

例えば、ジュニアリーダー活動、手作り人形劇、環境美化、国際交流、施設訪問、独居老人 宅の清掃、雪降ろし、年賀状作成など。

地域の課題を解決することが活動につながる。

- ③それぞれの地域に合ったサークル名を付けている。
- ○瑞々しいほど豊かな感性を持ち、希望に満ちあふれ、今を懸命に生きている若者を、将来を 担う若者を育てずして教育はあり得ない。公民館活動はあり得ない。

